

街談
巷議

中国革命遺跡の旅——貴州、重慶、長沙

(中国研究所所員) 中島 宏

今年の夏に貴州省、重慶、湖南省の長沙を訪れ、紅軍長征途上の遵義会議旧址、4回の渡河作戦で知られる赤水河、それに鄧小平、劉少奇、毛沢東、彭德懷、胡耀邦、毛夫人楊開慧の生家を見て回った。昨年の江西省に続く「紅色旅行」、車での走行は合計約2,500キロにも達した。

貴州省の省都貴陽は22年ぶりだったが、あの灰色にくすんだ街がまるで一変していた。中国の1級行政区の中で1人当たりGDPが最低という貴州省だが、さすがに変化は大きい。ビルが立ち並び、さらに新ビルやマンション群の工事が盛んに続けられている。夜の町も思いのほか華やかだ。ご多分にもれず、今や相当な大金持ちも誕生しているという。

貴州省は山地が87%を占め、石灰岩によるカルスト地形が73%、頂上が丸いお結び型の低い山々が並ぶ高原が南部、西部に多く、これから観光の目玉になりそうという。また多種多彩な鍾乳洞も人気を呼びそう。同じ石灰岩の地層でも、かつて旅して見た桂林などの広西やベトナム北部の尖った山々と少し違うようだ。貴陽を中心に南北に走って見聞した範囲では、山には樹木が無く草地だけで、畑作もできない。しかし山間のあらゆる土地は耕作し尽くされ、人口稠密、土地不足であることがうかがわれる。

貴陽から南へ2時間ほどの観光地、黄果樹瀑布へ行くと、大型バスが何台も並び、観光客でにぎわっている。滝は幅81メートル、落差74メートルで、アジア随一を誇るが、水不足のせい、全面が水の流れて覆われているわけではない。それでも滝の中ほどにある鍾乳洞を通り裏手に回って見る瀑布はさすがに圧巻だ。観光客は昨年で約230

万人、海外からも30万人が訪れるというから、貴州省最大の観光地である。

●楊虎城の悲劇

毛沢東が長征の途上、党・軍内の実権を握るきっかけとなったとされる遵義会議が開催された遵義までは、貴陽から180キロ、車で北上して約3時間半。重慶方面に抜ける高速道路を走り、途中2時間ほどの「息烽集中營」旧址に立ち寄る。1938年から46年まで国民党軍統局が秘密の監獄に使用、共産黨員やシンパ1,220人が捕らえられ、うち600人余が殺されたという。ここは本部で、14キロ北にある玄天洞もその管轄下にあった。玄天洞は西安事變の首謀者の1人で悲劇の人、楊虎城將軍とその家族らのための監獄だった。楊將軍は12年間の監禁生活のうち、8年間ここにいた後、最後には国民党が台湾に逃げ出す直前の49年9月、蔣介石直々の指令により、重慶で全員が殺害された。彼の妻は先に獄死し、ずっと一緒に監禁されていた息子と獄中で生まれた女兒の2人、また秘書夫妻と幼児の計3人、副官ら2人も殺された。西安事件での楊將軍の行動に対する蔣介石の執拗な恨みがこめられている。彼の悪行の1つとされるが、宣伝の仕方は旧日本に対するのと違いあっさりしている。

●遵義会議旧址

貴陽に次ぐ第2の都市、遵義は古くから四川、貴州を結ぶ物資の集散地として栄えただけに、建物も古い歴史を感じさせるものが少なくない。1935年1月15-17日に開かれた遵義会議（政治局拡大会議）の旧址は市内中心部にある。全体が「紀念館」になっており、毛沢東の書で「遵義會議会址」と書かれた入口を入ると、会場となった洋館風の建物が見えてくる。貴州軍閥王家烈の師団長、柏輝章の邸宅だった。レンガ造りに木材を使った柱廊付きの2階建てで、黒い屋根に白い縁取

り、白と黒をあしらった柱と壁、窓枠は赤みがかった茶色と、色彩のコントラストが見事な、しゃれた建物。2階にはぐるとバルコニーがつく。会議室は2階にあり、中央にマホガニーの古い長テーブルが置かれ、周囲には茶色の木枠がついた籐椅子が出席者20人分並んでいる。うち2つは机に面した椅子の列の後ろに、また反対側に別に1つ並べられている。オブザーバーで“列席”したコミンテルン派遣の軍事顧問オットー・ブラウン（リトロフ、李徳）とその通訳の伍修権の椅子ということだろう。また別の1つは中央秘書長で出席したとされる鄧小平のためか。他の17人は、毛沢東を初め、誰がどこに座ったかは書いていない。机と椅子のうち2つは当時の物という。

この部屋で彼らは、蔣介石の5回目の「囲剿作戦」に敗退し、中央ソビエト共和国を放棄せざるを得なくなった責任問題について、3日間にわたり激しい討議を重ね、党総責任者（総書記）の博古（秦邦憲）とオットー・ブラウンによる欧州の近代戦モデルの軍事方針を放棄し、中国式の新しい軍事方針を決めたのだった。コミンテルンの指示なしに、中国共産党が初めて自主的に自らの方向を決めた会議とされる。確かにその後の中国共産党、さらには中国の将来を決めたといえるだろう。

同じ2階には周恩来夫妻、朱徳夫妻が泊まった部屋がある。いずれも延安や瑞金で見た彼らの旧居より、はるかに上等な部屋だ。長征途中の束の間のぜいたくな生活だったのだろう。彭徳懷、劉少奇らの出席者もここに泊まり、彼らの部屋が残っている。

隣にある陳列館は昨年5月、会議70周年を記念して整備され、長征の模様を説明する資料や写真などを中心に多くの展示がある。中には毛を中心、遵義会議参加の幹部が並ぶ塑像もある。出席者の顔写真も、毛をトップに当時の政治局員、候補、軍幹部、それに鄧小平、ブラウン、伍ら20人が並ぶ。また長征に参加した鄧穎超など女性幹部30人

の写真も展示されている（2人は名前のみ）。現国家副主席曾慶紅の母、鄧六金（曾山夫人）や、当時、劉少奇の妻で後に戦闘中に行方不明となる謝飛、ブラウンの現地妻だった蕭月華、それに鄧小平の最初の妻で、長征当時は李維漢と結婚していた金維映の愛くるしい顔も見える。

陳列館では、ちょうど博古の二男、秦鉄氏が来ており、一緒に記念撮影となった。話をし始めるとお付きの男が強引に連れ去った。中国の幹部に荒っぽいお付きがいるのは、いつになっても変わらない。中国遠洋運輸会社の経理だったが、今は退職しているとのこと。写真で見る父親の博古の超秀才らしい大頭、度の強い眼鏡に四角顔とは大違いで、細面のスマートな人だった。

外に出て暫く歩いたところに博古故居がある。彼とブラウン、伍修権の3人が泊まった。同じように白と黒をあしらった外壁を持つ洋館風の建物で、1階に博古、2階にブラウンと伍の部屋があった。その少し先の元カトリック教会だったところに紅軍総政治部旧址があり、鄧小平はそこに泊まったという。毛沢東、張聞天、王稼祥の3人の故居は、少し離れた車で10分程の場所で、やはり同じタイプの柱廊付きの2階建て洋館風の家それぞれの部屋がある。

この宿泊の人的配置も当時の政治関係を反映している。周恩来や他の軍司令官たちは会議場の建物に泊まり、批判の対象となった博古とブラウン、反ブラウン中心勢力の毛、張、王は、それぞれ別の場所に居を構えている。だれが宿泊先の手配をしたのか、いずれにせよ、既に遵義到着前からの議論で、博古・ブラウンが孤立し、反対派の中心が毛、張、王の3人だったことは、事務方ならずとも周知のことだったのだろう。毛と張は既に江西省瑞金で長征に出発する直前にも同じ宿舎に泊まり、互いに理解し合うようになっていたというが、遵義はその延長だった。

●毛の序列

ところで、遵義会議前後の経過では、軍事方針に対する毛の主張が大きな影響力を持ったことは確かだ。既に遵義に来る前から、当初の予定を変えて国民党軍の攻勢をかわし、貴州に入ることを提案したのも毛だったという。しかし、遵義会議での彼の地位の確立を含め、毛に対するその後の個人崇拜の影響で、実態以上に大きく宣伝されているのも事実なようである。

毛は瑞金時代の1932年10月の寧都會議で、当時の党中央の意向により紅軍第一方面軍の総政治委員を周恩来に替えられ、軍権を奪われていた。遵義会議当時は、党政治局員で中華ソビエト中央政府主席の肩書のみ。遵義会議で政治局常務委員に昇格したものの、軍の役職はない。会議の結果、それまでの軍の最高指導部だった博古、ブラウン、周恩来の三人団は解消され、軍は朱徳と周恩来が指導し、周恩来が最終的な決定権を持つとされた。博古の党総責任者（党総書記とも言う）の地位は変わらなかった。会議の後、転戦の過程で、2月5日に党の総責任者が博古から張聞天に代わり、毛は軍事面で周恩来の補助者となる。さらに3月中旬には「毛沢東、周恩来、王稼祥」（周恩来が団長）による新三人団が成立し、全軍の軍事行動の指揮に責任を持つことになった（「1921-49中国共産党歴史」第1巻上。1984年3月4日公表の、35年2ないし3月に陳雲が会議経過を書いた手書きメモなどが根拠）。こうして毛が次第に軍内の権限を拡大していったのは事実だが、遵義会議で絶対権限を握ったわけではない。党のトップは同会議では博古、2月以後は張聞天、軍も周恩来が上級だった。毛が軍の実権を握るのは、周恩来が病気で倒れた35年8月以後のことだ。確かに毛の軍事戦略が支持されるようになり、彼の指導権が強まり、その後彼が党と軍の全権を握る端緒になったのだが、長年言われてきたように、毛が遵義で全権を握るまでに至らなかった。当時の党内、

軍内の事情があるはずだが、党の正史はその辺はまだ必ずしも明瞭ではない。

いずれにせよ遵義会議の段階での出席者リストで毛をトップに据えるのは事実には即していない。遵義会議陳列館では、20人の出席者の名前を、先の「中国共産党歴史」など正史の書き方に従い、毛をトップに、張、周と並び、批判された博古は最後になっている。また新三人団も「毛、周、王」の序列で書いている。ある陳列館の若いガイドは「歴史的事実では三人団は周、毛の順にすべきだが、政治力の大きさで、毛を先にしている」と正直に語っていた。また「中国共産党歴史」は新三人団について、毛がトップながら、毛の生前の言葉を根拠にしようが、「周恩来が団長」とわざわざ書き入れている。団長なのに2番目に名前が並ぶのも苦しいところ。遵義会議陳列館のパンフレットには、出席の政治局員、候補の名前の順序を「姓の筆画順」と断っている。これでいけば、党の正史とは真中の順位は違うが、毛がどうしてもトップ、批判された博古は最後に並ぶ。苦し紛れの選択かもしれないが、こうした配慮が目立つと、他の史実についても、どこまで「实事求是」なのか疑問にもなる。因みに84年に陳雲メモを基に公表されたリストでは、上述の筆画順と同じ並べ方になっている。正統派の党史のなかにも、当時の序列通りに「博古、張、周、毛～」としているものもある。遵義会議陳列館の元館長も、これらの序列についてはいつも論議的になっていることを認めていた。

●鄧小平の資格

もう1つの問題は、鄧小平のケース。正規の出席者は、彼以外は全て政治局員と同候補、軍のトップであり、彼の出席は何か異質でもある。前述の84年3月に公表されたリストでは、彼とブラウン、伍の3人については「出席者はさらに云々」と別扱いになっている。長征の記録を書いた米ジ

ジャーナリスト、ハリソン・ソールズベリーは鄧小平ら3人をオブザーバーとしている（『長征』時事通信社）。しかし、その後、恐らく鄧自身の証言などで、正式に党中央秘書長として出席したとされ、正史もあいまいながら、ほぼそうになっている。伍脩権の回想によると、鄧は最初は『紅星報』編集長の身分で列席、つまりオブザーバーだったが、途中から党中央秘書長になり正式に参加したという（『中国共産党歴史口述実録』済南出版社）。彼の娘の記述では、会議前の1月初めに党中央秘書長に任命され、その資格で参加したとしている（毛毛『わが父・鄧小平』）。鄧本人の言い分なのだろう。鄧がいたのは確かだが、現在言われている結論は、彼が権力を握ってからのものなので気になるところだ。

遵義会議会場を訪れる観光客は昨年で約50万人、03年の30万から大幅に増えた。この日も先生に連れられた子供たちも含め、大賑わいだった。

●赤水四渡河作戦の跡

次の日には遵義から西に向かい、1日ばかりで長江の支流で貴州と四川の間を流れる赤水河に沿って北上、紅軍が遵義会議後に国民党の攻撃から逃れるため、往復4回の渡河をした地点を見た。遵義から西へ約3時間で赤水河のほとり、マオタイ酒で有名な仁懷市茅台鎮に着く。川沿いに5キロにわたり、工場などマオタイ集団の建物などが連なる。ここは紅軍が1935年3月半ば、四川側に3度目の渡河をした地点で、マオタイ工場の対岸に簡素な記念碑が建っている。川はここから上流100キロには、マオタイ製造の用水のため、工場などの建設を禁止しているという。マオタイ工場は全集団の人員8,000人、生産量は昨年で80年代の約5割増しの1万2,500トン。ただしここでは「国酒文化城」という中国酒の大博物館を見ることができただけで、工場は見学禁止、他の銘酒工場でよくある試飲もないのがっかり。博物館では、

米中会談や日中国交交渉など、内外いろいろな機会にマオタイを宣伝してくれた周恩来が一番の人氣で、至るところに登場する。

赤水河沿岸をさらに北に行くと、谷が深まり、紅軍が35年2月中旬に四川省側から貴州省へ戻った第2回渡河と、最後に3月下旬、やはり四川から貴州に戻った第4回の渡河地点に着く。川原の真中に「二郎灘渡口」と書かれた大きな石がある。川幅も広くはなく、当時もそれほど渡河が困難な場所ではなかったように思える。紅軍は2回目渡河で貴州省に戻った後、遵義北方の婁山関で国民党軍に大勝し、遵義を再占領、蔣介石を慌てさせた。4回目は貴州に再び戻った後、意表を突いて西へ回り、雲南省に転進し金沙江を渡った。

二郎灘から1時間ほど北に川を下ると、1935年1月29日、貴州側から四川省に入った第1回目の渡河地点、貴州省習水県土城鎮に着く。赤水河にかかる土城大橋の上で、直接選挙で選ばれたという若くハンサムな袁正綱副鎮長（30）の説明を聞く。橋のすぐ下が、党中央の中央隊と彭徳懷らの紅三、紅五軍団が、にわか作りの浮橋で渡ったという場所。また夕日に映える川下を眺めると、はるか前方に、林彪らの紅一、紅九軍団が渡った赤水市猿猴（現元厚）の渡河地点がぼんやり見える。川幅は、当時は今の2倍の200メートルほどで、水量も多かったというから、敵に追われながらの3万人の軍の移動は相当な困難を極めたことだろう。この前日には、橋の東に見える小山の先にある青杠坡で激戦があり、紅軍は死傷者3,000人という、長征途上で最大の損害を蒙った。国民党側の死傷者も同数というのだが。紅軍は川を渡り四川側に難を逃れた。

土城の市街地に「四渡赤水紀念館」があり、長征の全体の動きから、四渡赤水の間に起きた党軍最高指導部の変化などについて、図や資料と写真で詳しく紹介している。紅軍は第1回目の渡河の後、2月10日に雲南省扎西（現威信）で再編をす

るが、そのリストを見ても軍内に毛のポストはまだない。ジグザグの進軍は、国民党の目をくらますための毛沢東の作戦だったとされ、金沙江渡河で四川省を北上するルートを確認し、ようやく生き残りの道を開いたのだった。

●重慶の文革墓と三峡博物館

赤水河の下流、四川省との境にある赤水市に1泊し、翌日は四川省の瀘州を通り、重慶に向かう。約200キロ、4時間のドライブだ。瀘州は酒で有名だというが、新市街地は道路も広く、新しい建物が立ち並び、なかなかの都市だった。

重慶は前回に見た3年前よりさらに高層ビルが増え、長江のほとりにそびえ立つビル群は圧巻だ。おびただしい数の高層マンション群もさらに建設中。長江、嘉陵江の合流地点の朝天門で、夜景を見下ろすレストランで食事をした。周辺は鮮やかにライトアップされ、川をさかのぼる豪華な遊覧船も直下に見える。

華やかな夜景とにぎやかなレストランの料理を眺めながら、直前に訪れた文革犠牲者たちの墓地の、あまりにも対照的な寂しい風景を思った。市内沙坪公園の片隅に、うっそうたる樹木が生い茂り、雑草も目立つ墓石の数々。広さは2,000平方メートルもあるという。重慶は文革中、対立するグループ間で、全国でも最も激しい武闘が行われたことで知られる。軍需産業が盛んな土地柄から、武器も多数持ち出され、最後には戦車や高射砲まで動員された。この墓地は武闘の一方の側だった「八・一五兵団」の犠牲者を葬った墓地で、労働者や紅衛兵約400人が葬られている。長方形や四角など様々な形をした100余の大きな墓石群には、死者の名前や「死しても毛主席を守ることを誓う」などと書かれた碑文が刻まれている。相手グループの墓は別にあるが、これ程の規模ではないという。定期的に公園に来て参拝するという人もいたが、それほど多いとも思えず、清掃も十分でない。

それでもなお重慶のきらびやかな繁栄の陰にひっそりと残されている。

市内中心の人民大礼堂の前に昨年6月にオープンした巨大な「重慶三峡博物館」がある。三峡ダムの紹介だけでなく、日中戦争のコーナーが大きな部分を占め、多くの写真や資料の他に、日本軍による重慶爆撃を、大型スクリーンに映像、音響などを用いて、轟音と犠牲者の哀れな悲鳴まで生々しく再現する施設が目玉になっていた。展示は宋家3姉妹の活躍など国共協力に加え、アメリカとの国際協力による抗日戦のイメージが盛りされている。しかし日中戦争中は重慶が国民政府の所在地であったにしては、抗日の主体が共産党で、国民政府の役割にあまり触れていないのは公平を欠いている。

●緑あふれる鄧小平故里

重慶市内から140キロ、高速道路を走って2時間余で四川省広安市協興鎮牌坊村に着く。「鄧小平故里」は全体で約55ヘクタールの広大な敷地の中に、椅子に座った姿の大きな銅像、彼が生まれ育った「故居」、陳列館その他の建物が配置されている。花が咲き、樹木が茂り、大小4つもの池も備え、緑あふれる広大な公園である。この後の毛沢東ら各指導者の故里も同じように銅像、故居、陳列館の3点セットをそろえ、歴史と緑の公園風の間所になっているが、鄧小平の故里は毛を上回る規模で、全体に新しいだけに、モダンだ。その代わり入場料は60元と他の2-3倍。

灰色の瓦屋根と木造、白壁で三合院の故居は、この後、湖南省で見る他の指導者の家よりはるかに立派である。中は他とほぼ同じ作りで、入って中央の正堂宇に先祖を祀る祭壇があり、両側に部屋が続く。彼が生まれた両親の寝室や、その後彼が住んだ部屋などがある。父親は土地の有力者で地主だったというだけに、17室という部屋数は多くないが、各指導者の中では最も敷地が大きく上

質であり、彼が他の人々よりも相当に上流の階層出身であることが感じ取れる。

2004年に生誕100周年を記念して建てられた「鄧小平陳列館」は、電子機器など様々な近代設備を備え、映写会場もある。また多くの遺品が残されているが、衣類や帽子などの他に、勤工儉学でフランス滞在中の労働カードや、1984年の軍閥兵で乗った大型車「紅旗」、米国訪問でもらった大きなカウボーイハットと皮の長靴、トランプカード、晩年に禁煙した際、最後に残った熊貓印の煙草3本、日本製電器カミソリ、スイス製時計と、雑多な物が並んでいるのも面白い。文革中の苦難の部分は、ごくあっさり扱われている。

協興鎮の80%以上は鄧姓というが、「故里」が現在の広さに拡大した際、300戸が土地を収用され、農業をやめた。だがその多くがここで何らかの形で仕事を得ているという。周辺にはレストランや土産物店などもあり、大型の観光地になっている。そんな所に働くのも彼の一族だ。最近の観光客数は年間で約100万人。毛を含む各指導者の故居の中で最も多いのは、彼の人気の高さと重慶という地の利のせいもあるだろう。だが本人は15歳の時、フランスに行く準備のため家を出て以来、建国後も帰郷することはなかった。

車のドライブと飛行機の窓から見た重慶周辺の地形は、貴州の山々とは違い、無数の小山がどこまでも続き、しかもその山頂まで耕作されている。やはり人口稠密、土地不足なのだろう。そのせいか以前に陝西、江西、山西などで見かけた「退耕還林」は、重慶周辺ではほとんど実行されておらず、緑の林に戻すべき高傾斜地もそのまま耕作されている。お上の指導も重慶、四川にはあまり及んでいない。

●一変した劉少奇故里

長沙周辺の劉少奇、毛沢東、彭德懷の生家は互いにすぐ近くにある。道順に従い最初に行った劉

の生家は、長沙の市街地から50キロの長沙市寧郷県花明樓鎮。毛の生家までは35キロ、毛から彭までは50キロ。毛の指導した文革中に、劉、彭の2人が残酷な扱いを受けて憤死したことで、生家がこんなにも近いことがどう絡むのか。毛が同郷の2人の死に責任があるのは確かだが、そこまでに至る長年の心理的な関係に興味がそそられる。

「劉少奇故里」までは車で1時間半。舗装されてはいるが揺れがひどく、あまり快適でない道を行くと、周辺は20年前に行った際とは一変していた。当時は故居があるだけだったが、今は鄧小平ほどではないものの、46余ヘクタールの敷地に彼の銅像と故居、紀念館、文物館その他の建物が散在、全体が緑の公園に変わっていた。彼が乗った飛行機まで展示されている。

入口の牌門を入ってすぐに銅像広場。人民服に軽くコートを羽織り、端正なマスクでじっと遠方を見詰める彼の銅像は、高さ7.1メートル。党創立記念日の7月1日と彼が71歳で亡くなったのに合わせたという。

故居の面積は、先の鄧小平よりも3割方小さいが、部屋数は多い。文革中は閉鎖されており、彼の名誉回復後の1980年に再開。黒い瓦、一部草葺の屋根に土壁の農家で、毛沢東の家より部屋数も多く、上質な家である。父親が富農で、商売もしていただけに、富裕な家庭だったことをうかがわせる。中は他の家とほとんど同じ作りで、彼が生まれた父母の寝室、彼と兄弟の寝室などが並ぶ。21歳で家を出た後、1961年、40年ぶりに妻の王光美を伴って再訪している。

新設のモダンな「劉少奇紀念館」には、彼の生涯を追った資料や写真などをかなり詳しく展示。国民党に捕まり南京の雨花台で処刑された2度目の妻、何宝珍も烈士として姿を見せる。彼は61年に来た際には、大躍進で疲弊した農村の実情を知るため、多くの農村を44日間にわたり視察した。その際、彼が招集した座談会に出席した地方幹部

の筆記ノートの原本が展示されている。毛沢東と
の良好な関係を示す写真が何枚かあるが、文革中
の資料はあまりなく、突然に最後のコーナーにな
る。ここでは、国家主席だった彼が十分な看護も
受けないまま孤独の死を迎えた際の医師の検死証
明書と火葬申請書、使用していた質素な毛布など
が置かれ、文革の異常さを際立たせている。また
彼の手元に残された文物を保存する文物館が別に
ある。「劉少奇故里」への年間の参観者は約40万
人という。

●毛紀念館を改修

次の毛沢東の家は、やはりあまりよくない道を
車で45分ほど行った韶山市上屋場にある。長沙か
らは50キロ。湖南省の直轄市で事務は湘潭市が管
理する。文革中に長沙から専用の鉄道が敷かれ大
いに賑わったが、今は観光バスで来る人が多いた
め、本数も少なく、駅も閑散としている。

故居とその前の大きな2つの池、彼が幼少の頃
に通った私塾、毛一族の宗祠などは20年前に来た
時と大きな変化はない。周辺に水田が青々と広が
る。だが新たに毛の大きな銅像が立ち、毛沢東紀
念館も改修され、展示も新しくなっている。ここ
で見える範囲の毛関連施設の広さは、後方の象鼻
山の中腹にある彼の父母の墓も含めて約8.7ヘク
タール。時間がなくて割愛したが、西側の少し離
れたところに、大小さまざま100近くもの建築を
配した、敷地約20ヘクタールの「毛沢東紀念園」
が設けられ、95年に開放されている。ここまでは
鄧小平、劉少奇のところより面積が少ない。だが
西に5キロほどの場所にある毛の別荘「滴水洞」
や、長沙市内の毛関連旧跡を含めると、恐らく毛
が最大になるだろう。

「毛沢東故居」は黒い瓦屋根に土レンガの壁、
敷地は劉少奇より広いが、部屋数は少ない。ここ
だけは無料、写真などは禁止されている。参観者
は年間80万人、鄧小平より少ないが劉少奇の2倍

だ。この日も参観者が多く、暫く並んでようやく
中に入れるが、人がいっぱいでは落ち着かない。内
容は以前とほとんど同じ。彼が生まれた両親の部
屋と、彼が家を出る16歳まで住んだ部屋、革命中
に犠牲になった2人の弟の部屋や厨房、農具置き
場など。彼の家庭は富農とされるが、家の質は劉
少奇より落ちる。

毛沢東の銅像はおなじみの人民服スタイルで、
高さは建国の日に因んで10.1メートル。生誕100
周年の1993年12月に建立されたが、その日には不
思議なことが数多くあったという。山には季節は
ずれのつつじが満開、空には日と月が同時に輝き、
6羽の蝶が舞った。彼の弟2人、従妹、甥、妻の
楊開慧、それに朝鮮戦争で死んだ長男岸英の6人
の毛家革命烈士が蝶になって飛来した、と今も語
り継がれている。

改装されていた紀念館の面積は鄧や劉の2倍以
上で、展示の仕方は以前よりはスマートになって
いる。全部で12室あり、彼の生涯を説明し、最後
の部分では彼に関する評価として文革などの誤り
を指摘しながら「功績第一、誤り第二」とした81
年の歴史決議と鄧小平の言葉で締めくくっている。
さらに党中央が認可して中南海から搬入され
た500件にのぼる彼の遺品は圧巻だ。中南海の豊
沢園故居の一部が再現され、また資本論、レーニ
ン全集、魯迅全集などの書物や資料を入れた大き
な書棚、身の回り品などが置かれている。毛家6
烈士のコーナーもある。長沙では文革中も含め、
毛の夫人は楊開慧だけ。江青は毛の「四人組批判」
などに出るのみだ。毛が読んだ書物などを集めた
図書館が別にあり、古典や文学関係の書はこちら
に入っている。毛は建国後は59年と66年の2回、
韶山に来ており、66年には11日間滞在し、滴水洞
に泊まるなどして文革進行の構想を練っている。

毛沢東グッズの商売も盛んで、新しい店が増え
ているが、66年に毛が来た際、毛と語り合う写真
で有名になった農民の子孫が経営する毛霞生飯

店、毛家珍品商行など、地元農民の店も手堅く商売をしている。

この後、少し車を走らせて、毛の後継者となった華国鋒が湖南省党書記の在任中に指導して作った用水路、「韶山銀河」を見た。豊かな農業用水が全長240キロを当時と変わらずとうとうと流れている。中国各地の農村には、文革中の人海戦術により、安いコストで作られた農業の基本建設投資が今も生きており、その後の農業投資の不足を補っているが、ここなどは典型的なケースだ。

●自分で建てた彭徳懷

彭徳懷の家は湘潭市湘潭県烏石鎮にあり、毛の家から約1時間半。やはり他と同じように「故居」を中心に広大な「彭徳懷紀念園」ができており、白色の大きなしゃれた紀念館が建てられ、周辺には樹木が植えられている。紀念館前から大きな階段を上ると高台の上に軍服姿の銅像が前方をにらんでいる。建軍記念日に合わせて銅像の高さは8.1メートル。全体の面積は13ヘクタールと毛、劉よりは小さい。

彼は貧農の出身で、しかも父が早く亡くなり、兄弟3人は祖母に育てられたが、一時祖母と乞食に出たほど貧しかった。家もあばら家だったが、18歳で当時の湘軍に入って兄弟に送金し、10年後に家を建て替えることができた。黒い瓦屋根に白壁の立派な家で、規模も他に劣らない。家を守ってくれた兄弟2人は国民党に殺されたという。

彼は1958年と61年にこの家に来て、現地視察した。紀念館には、彼が1959年の廬山会議の際、毛沢東あてに大躍進に対する疑問を書き、失脚する原因になった書簡のコピーや、文革で迫害され、死亡した際の身の回り品、後に「彭徳懷自述」として公開された手書き原稿を入れ自宅に隠されていた壺などが展示されている。また朝鮮戦争中の彼の業績についての紹介もあり、彼が指揮を取った地下壕の様子も再現されている。ここへの参観

者は軍関係者などを中心に約30万人という。

●胡耀邦の先祖は進士

胡耀邦の家は長沙から一路東へ約100キロの瀏陽市中和鎮蒼坊村の山に囲まれた静かな地にある。黒い瓦屋根、赤茶色の壁の三合院だが、いかにも居心地のよさそうな家だ。広さは他とあまり変わりはない。部屋の構成もほとんど同じだが、内装は立派で、質は毛、劉よりかなり上だ。仕事部屋に花火を作る木製の道具があった。瀏陽市は中国内でも有名な花火と爆竹の産地で、国内だけでなく、日本など外国にも輸出しており、近くの大瑤鎮には花火の工場街と中国花火の始祖李畋の大きな銅像がある。胡家の道具も内職用と思われる。

彼の4代前の先祖は科挙に合格した進士で、大学士の位を授けられているから、階層としては彼の先祖が最も上流といえる。しかし彼の父の代には没落して貧しくなり、中農程度とされる。彼は中学を中退し、15歳で家を出て革命活動に参加、翌年には瑞金の根拠地に行った。紅小鬼とよばれる年少黨員だが、そうなったのも同郷の毛沢東も加わった湖南、江西での共産党の華々しい活動に影響を受けたためだろう。家が近いだけに当時の時代の風をまともに受けたはずだ。その彼も、文革後は当時の指導部内で最も毛に厳しい評価をしていたといわれ、党組織部長時代には、反右派闘争から文革まで毛の時代に批判された幹部を一斉に名誉回復するのに尽力しており、いわば毛の時代を抹消した人ともいえる。やはり同郷人であることとの関係も気になる。

家に隣接して「陳列室」が建てられているが、内部は撮影禁止。文革中の見る影もないほどやつれた写真があった。また既に故居と向き合う小高い台地に白色の2階建ての陳列館が完成しているが、昨年11月の生誕90周年以後もまだ正式開館が許可されていない。しかし今年になって曾慶紅、呉官正の両政治局常務委員がそれぞれ来訪してお

り、開館も時間の問題だろう。本人は1963年に帰郷して農村の調査をしたことがある。参観者はまだ少なく、昨年で約6万人。彼の政治評価がまだ微妙で、大きく宣伝されていないためという。

●最も広く古い楊家

毛沢東の妻、楊開慧の実家は長沙から北に約55キロの長沙県開慧郷開慧村板倉屋上。長沙市に属する。毛の長沙第一師範時代の恩師で、北京大学の教授になった父親、楊昌済の家だった。彼女は毛沢東と結婚した後、毛が軍事闘争の道に入ったのに伴い、1927年夏からここに住み地下活動をしていたが、30年10月に毛の妻ということで国民党に捕まり、翌月長沙で処刑された。黒い瓦の屋根にレンガ壁の故居は36間、建築面積も680平方メートルの四合院で、今回訪れた中で最も広く、また最も古く由緒ある家である。家の中の構成はほぼ同じで、家族それぞれの部屋があるが、中に毛が21年の春節に来て泊まったという部屋もある。彼は3回訪れ、農村調査をしている。90年に家の修理中、1,000余字の彼女の手書き文書が見つかり、一部コピーが展示してあるが、実物は湖南省博物館にあって公開されていない。

すぐ近くにある彼女が通った小学校が陳列館になっており、彼女の生涯と楊教授、息子の毛岸英などについて紹介されている。

故居とは国道を挟んで南側の楊家の墓地は楊開慧陵園となり、中央に彼女の白玉の像が立っている。将来は新しい陳列館も作られる予定という。参観者は昨年で約10万人。道路の便がいいので将来はさらに増えることだろう。

●地域振興と建設ブーム

長沙には毛が若いときに学んだ長沙第一師範がある。中には「青年毛沢東紀念館」が設けられ、彼が学んだ際の机と椅子などがそのまま保存されている。また彼の若い時代の友人、恩師らの展示

があり、彼の人格形成のプロセスが紹介されている。この他、毛に因んだ旧址は数多く、長沙は今も毛沢東の世界である。

ところで長沙で今度見た毛、劉、彭、胡家の先祖は、その族譜から調べると、全員が隣の江西省から湖南省に来て定着した人々といわれる。特に毛沢東については以前からよく知られ、今も現地のガイドブックでも紹介されている。それによると、600年以上前に、下級軍人だった彼の19代前の先祖毛太華が、明の朱元璋軍に従って雲南に行った際、苗族の女性と結婚、生まれた子供のうち長男と四男を連れて湖南に来て定着したとされる。他の子供たちは雲南に残ったが、長沙のテレビ局が昨年、取材中に雲南でその系統の一族を偶然発見し、湖南、雲南の毛一族が長沙で対面して、大きな話題になったという。また胡耀邦の先祖は江西の徳安出身というが、彼が遺言で選んだ墓地が徳安県にある共青团開発の農場であるのは、何かそうした因縁があつてのことなのか。

有名人を輩出した湖南省は各地に彼らの旧址があり、地域おこしと最近の建設ブーム、旅行ブームが重なり合って、名所が次々に開発されている。長沙の周辺だけでも、曾国藩、黄興、任弼時、何淑衡らの故居が宣伝されている。新しくは朱鎔基故居も地図に載っている。また李立三の故居も地図にはないが、参観できるようだ。

生家に見る中国革命の元勳たちの顔は様々であり、また彼らの足跡の記念と愛国主義教育、あるいは観光による地域おこしを狙う現地の人々の思惑もまた様々なようだ。

(注：各故居の年間参観者数は現地ガイドによる。ネットなどでは鄧500万、毛305万、劉120万、彭50万などがあるが、違いの理由は不明。旅行者だけでなく、現地での学習運動ないしイベントなどの動員も含む数字か)。